

ラテン語の動詞体系について Sur le système verbal latin

小畑 明
Akira OBATA

多くのロマンス語動詞体系は、古典ラテン語のそれをほぼ伝承した形で現れる。これに対し、ルーマニア語では接続法においていわゆる過去形（未完了過去、過去完了）が欠ける。ラテン語の動詞体系からどのような変遷をへてこのような相異が起こったのであろうか。先ずラテン語の動詞体系を見れば：

ラテン語動詞体系

	fut.	prés.	impf.	pf.	*pf.	p-q-pf.
ind.	faciet	facit	faciebat	fēcit	*habet factum	fēceram
subj.		faciat	faceret	fecerit	*habeat factum	fecisset

フランス語動詞体系

	fut.	prés.	impf.	pf.	p. simple	p-q-pf.
ind	fera	fait	faisait	a fait	fit	avait fait
sub.		fasse	fit (fasse)	ait fait		eût fait (ait fait)
cond.		fairait	aurait fait			

ルーマニア語動詞体系

	fut	prés.	impf.	pf.	p. simple	p-q-pf.
ind.	va face	face	facea	a făcut	făcu	făcuse
sub.		să facă		să fi făcut		
cond.		ar face		ar fi face		

上の表を比較して、先ず考えられることは、ロマンス語では、いわゆる複合過去形が例外なく現れていることで、これは少なくともロマンス語それぞれの改新ではなくロマンス語の基である俗ラテン語に既に現れた現象であろう。しかしこの形がラテン語の *fecit* と共にロマンス語に残ったことには、少なくともその機能の相異が存在したからである。つまりラテン語の *perfectum* が本来持っていた *perfectum praesens* と *aorist* の内容の相異をそれぞれ複合形と単純形を用いて形式によっても現す必要となったことを現す（この逆の現象が今日見られ、有史以前のラテン語と同じように両者の区別を余り必要としなくなった現在の多くのロマンス語では単純形が衰退の一途を辿っているのは興味のある現象である。）そしてこれに対応して多くのロマンス語では、*p-q-pf.* が複合形により置き換えられた。更にこのような複合形が、フランス語の *ait fait, eût fait* のような *subj.* にまで拡がることは充分納得の行く過程である。

既にラテン語において *subj.* の価値は一義的に定義が困難である。現代語から逆に推論した結果としてそれが客観的事実ではなく、思考の構成物を現す、と一応言うことにしても、いわゆる時制は、*ind.* とは決して対応を示さないことは文学ラテン語において、特に口語ラテン語において顕著に現れている。何れにせよ接続法では、*prés.* と *pf.* 或いは *impf.* と *p-q-pf.* の間の混乱が多く見られ(*cfr. fr. fit < fecisset.*)。

注目すべきは *ind.* の副時制 (*impf., pf., p-q-pf.*) に対応する *subj.* の地位である。これらはルーマニア語には無く、現代フランス語でも通常は *subj. impf.* は *subj. prés.* によって、*subj. p-q-pf.* は *subj. pf.* によって置き換えられ、それら持つ機能がほぼ無くなっていることを示している。

ここで以上の進化の過程を、また従来は法と事象を軸に位置づけられた動詞活用形相互の関係を一層明確にするため、従来の枠を越えて更にラディカルな *dictum* と *modus* の二軸を設定し、各動詞活用形の位置づけを試みみる。

ここで言う *dictum* とは Ch. Bailly の定義を拡張したもので、動詞の *procès* に対する当事者の時間的位置を言うとして定義する（いわゆるアスペクトにほぼ該当する）。*dictum* では話者の介入は未だない。

dictum には次の4相が考えられる：

dict.-ante: 当事者は *procès* を前に見る。 *procès* を「食事」とすれば「食事前」を現す。

dict.-in: 当事者は *procès* の中にある。 — 「食事中」 — 。

dict.-post: 当事者は *procès* の後にある。 — 「食事後」 — 。

dict.-aorist: *dictum* の概念以前の状態、つまり *procès* との前後関係の規定を持たず、*procès* そのもののみを言う。 「食事」

最初の3つの *dictum* が時間上の位置の規定をもち静的であるのに対し、*dictum-aorist* は *procès* そのものを示す動的概念である。

次に *dictum* に対する話者の時間的位置として *modus* が同じように時間的前後関係として定義される。

modus- ante: 話者は *dictum* を前に見る。話者の予測。

modus- in: 話者は *dictum* の中にある。 *procès* は話者の眼前に展開されている（いわゆる現在時制にほぼ対応する）。

modus- post: 話者は *dictum* を過去に起こったこととして述べる（いわゆる過去時制）。

modus- aorist: 話者は *dictum* に対し時間的规定を為さない（無時制）。

ラテン語

	dic.-ante	dict. -in	dict.-post	dict.-aor.
mod. -ante		faciat	fecerit (habeat + factum)	
mod.-in	faciet	facit	feci, (habet factum)	
mod.-post	faceret fecisset	faciebat	fecerat, (habuit factum)	fecit
mod.-aor.		(facit)		(fecit)

フランス語

	d.-ante		d.-in	d.-post	d.-aor.
m.-ante			fasse	ait fait	
m. -in		fera	fait	a fait	
m.-post	fit eût fait	ferait aurait fait	faisait	avait fait	fit
m.-aor.			fait		

ルーマニア語

	d. ante	d.-in	d.-post	d.-aor.
m.-ant		să facă	să fi făcut	
m.-in	va face	face	a făcut	făcu
m.-post	ar face ar fi face	facea	făcuse	
m.-aor.		face		

上の図に関する考察点：(これ以後、動詞活用形のdictum とmodus による位置づけを示すのに、幾何学において平面上の点を示すのに座標を用いるように、例えば dictum-in, modus -post は[in, post] のように現すことにする。

先ず既にラテン語でも行われているように、dictum と modus の混同である ([post, in] と [aor. post], [ante, in] と [in, ante] 或いは [post, ante] など)。

特にこのante は、dictum に関しても modus に関しても意味上の大きなニュアンスを含んでいることを述べねばならない。予期は、procès に対する当事者の、或いは dictum に対する話者の時間的位置のみならず、期待、願望にまで至る可能性を持つ。

新しい図では大きく変わったことは、従来の接続法と直説法未来である。ラテン語を例に取れば、接続法現在形 (faciat)、同完了形 (fecerit) はそれぞれ[in, ante], [post, ante] として接続法は modus-ante を特徴とするが、接続法未完了過去 (faceret) と接続法過去完了 (fecisset) は共に [ante, post] (faceret = 「為しることを彼は予期していた」; fecisset = 「為してしまっていることを彼は予期していた」) として位置づけられる。またいわゆる未来形は、殆ど全ての未来形の発生が示すように話者の規定以前の procès とその当事者との関係である。

従ってそれは[ante, in]として規定される。

ラテン語のいわゆる未来形faciet に遡る形がロマンス語に存在せず、多くのロマンス語では habeo を、またルーマニア語のように volo による迂言的な表現に遡る形で現れることから、ロマンス語の起源となった俗ラテン語は faciet をもはや失っていたと言われている。そして各ロマンス語で新たに現れた[ante, in]形 (fr. fera, roum. va face) を基礎として [ante, post] 形が生ずることは自然の現象と思われる。そこでフランス語のようにラテン語から継承した形を残した言語では同一枠内における二種の形は、本質的には同じであったが、意味の異化が生じ、新しい形が単純な時間的關係を述べるのに対してラテン語継承形は期待、願望の要素を多く持つ。

modus-aor. は、時間的規定のないmodus である。ラテン語を始めロマンス語でも無標形 [aor., aor] ではない[in, in] がそこに来るのは、多くの場合こうした表現は時間的規定を持たなくても、繰り返し、連続などの意味が伴うからであろう。

口頭発表では従属文におけ動詞の活用形に関して述べたが、未だ未解決の問題を多く含むので、ここでは故意に触れずにおく。何れにせよ、従来の文法カテゴリーを若干改め、dictum と modus を座標軸として、同じ關係を用いて動詞定型を記述できる可能性に興味を感じている。